

今どきの子育て

森 まさ子 Masako Mori, RN

大分県立看護科学大学 専門看護学講座 小児看護学 Oita University of Nursing and Health Sciences

2001年2月2日投稿, 2001年3月14日受理

キ - ワ - ド

個性尊重、発達参加、環境との相互作用、親子、人格、試行錯誤

Keywords

individual respect, participation to development, mutual action of environment, parent and child, personality, trial and error

1. はじめに

我が国では、経済の進歩と社会構造の変化に伴い、女性の社会参加が進み、育児環境も多様化し、少子化の進行が憂慮されている。親の単身赴任、離婚率の増加、核家族化の中で子どもの能力開発や塾通い、育児用品、遊具の開発等は進行し、子どもの生活環境も変化している(田中, 2001)。親のライフスタイルの変化とともに、食習慣・運動の不足・友達と自由に遊ぶ空間・時間の不足をもたらし、健康面での問題が憂慮されている。地域によっては、子育てのサポートを得ることも難しく、一方で、女性の生き方も多様化している。母親は子育てが大切な営みであるとわかっているが、それだけでは、満たされない何かが女性の心の中に生まれ、子育てをしながら自分探しをしている人が増えている(子育て環境を考える会事務局, 2000)。手早く効率よく生活することに慣れ親しんだ大人が、子どもへの対応に不安があり、子育て中の親は自分の子どもにどのように接したらよいのか戸惑い、いま子育ての責任が母親に重くのしかかり、育児ストレスや子ども虐待等が憂慮されている(日本子ども家庭総合研究所, 2001)。

2. 子育てによって大人も成長する

高層マンションの一室に母親と子どもが互いに息をひそめ背中合わせで暮らしている、そんな閉塞感と孤立感に満ちた子育ての光景が現代の子育てを象徴しているように、母親の子育てに対する不安やゆとりのなさが、子どもの発達面に歪みをもたらしている。

「親はこうあらねばならない」という固定観念にとらわれ、緊張する人や心身共に疲れている人もいる。調査資料によると、核家族で、子育て中の母親の4割が自分の時間が持てないことをあげ、外出時、預ける先がない人は14%、育児やしつけの方法がわからないという人16%となっている。子育てが楽しいと感じている母親の国際比較では、アメリカ71.5%、韓国53.7%、日本21%である(日本子ども家庭総合研究所, 1998)。この違いは文化の違い、子どもとのコミュニケーションの取り方、しつけの仕方の差等も考えられるが、これは、今後の研究課題でもある。子どもの成長過程で親子が共に関わり生きる人間同士として慈しみ合いながら、戸惑いつつも自分を見つめたり、子どもの純粋な反応に感動したり新たな発見に驚いたり、発達過程を大らかに見守り楽しむことは、生きる基本の姿そのものである。子どもの存在に慰められ、生きる希望をもつ人も多い。子育てを通して自分自身をより豊かに育て直してゆく事業に関われるのは両親の特権であり、子育てには子どもが大人を育てる側面と、子ども自身の力で育つ面と、大人も成長する部分が共存しているところに素晴らしさがある。人間は、生まれつき成長する力が備わっているが、周囲の人との関わりによって、人間らしさや社会に生きていく上で必要な知識・行動や習慣などを繰り返しながら身につけ、より複雑なことを考えたり追求できるようになる。大人も夫婦がうまくつきあうことを学んだり、子育てによって子どもとの付き合い方を学んでいく。子育ては、夫婦の協力が際だって必要となる営みである。新生児も次

第に成長し、個性と発達過程での特色を顕わしつつ長い過程を経て成人し自立していく。発達すると云うことは他人が発達させるのではなく、自分の力で周りの環境に関わりながら、自らを変え、相手を変えるというフィードバックを繰り返して、自分の能力を形成していくことである。

3. 子育ては、子どもの発達に参加することである。

親の考えを子どもに押しつけることではない。しかし、子どもの発達を見るということはきわめて難しい。発達は総体的なもので、目に見える部分、測定できる部分は一部分で、内面的な諸能力と絡み合っているので一見してわかる訳ではない。体重や身長が伸びたとか、
ができるようになるということもさることながら、その子が人間としてどのように育っているか、人格の形成が問われる営みである。人間と人間が交流のなかで感じ、響き合うものが必要になってくる。それは、生活の小さな営みの積み重ねの中で行われるものである。発達に添うということは、子どもを主体にすることである。しかし、単に寄り添っていれば良いという感覚的なものではない。子どもの要求をそのまま刹那的に満たすことでもない。発達に必要なことを見極めることが前提である。子どもの発達の一般的特性を理解すると同時に個人の特性を把握する必要がある。さらに、子どもの生活に映し出された反応の意味を見極めながら対応することが、発達に添うことである。子どもと対話することで相手の思いを感じ取り聞き取ることができる。疑問を投げかけ、納得したり、確かめたり、共感しながら、こころの声を聞くことが大切である。それは、子どもの気持ちを思いはかりながら、相手の気持ちになろうとし、子どもと同化しようとすることである。その中で相手との共感を楽しんだり、共に新たな考えや行為を造り出そうとする対話である。それは、発達に添う者として、自分の在り方を発見することでもある。まだ、ものが言えない乳児に話しかけると言葉にならない表情や音声や仕草を返してくる、乳児を愛する大人は言葉にならない対話ができるのである。子どもと親の間にこうした通じ合う喜びの共有経験から信頼関係が成立する。求め合い支え合う関係が子育ての基本である。ことばを獲得するときの乳児と母親の関係を思い起こしてみるとそれがわかる。口元を見つめ自分も声を出す頻度を高める模倣的発声と自発的発声をしながら乳児は喃語を発していく。それに母親は意味づけをしたり、対応

をすることで言葉を獲得していく。単なる音声のやりとりではなく、言葉を形成していくための働きが相互に作用し合っている。それには勿論感情の共有、事実や場の共有等言葉を獲得する状況や心身の発達を促すあらゆる条件が絡まり合う。この関係は子どもが環境と関わって発達するという場合も同じである。親と子が周りの環境と、どのような相互交流をもつか、外界と関わった経験をもとに、自分の存在を知り生きる力を獲得していくのである。

4. 環境との相互作用が子育ての中心である。

幼児期は個性が現れ友達との遊びも活発になるので、その子独自の歩みを受け入れることが大切である。思いきり遊び、心身を動かすことにより、さまざまな人や物から刺激を受け、繰り返し経験し試行錯誤することによって、喜びや痛みを知り、疲れや危険を知る。他人を気遣い助け合い競争する心、善し悪しを判断する心が生まれる。そのため幼児には、母親や家族だけでなく自由に遊べる三間(時間、空間、仲間)が必要である。友達との遊びを通して実に多くのことを学んでいく。幼児期に体験を豊かにすることでその後の集団生活に抵抗なく適応してゆくことができる。少子化時代に多様な友達と遊び、国際化の時代に様々な国の子供と遊ぶ体験も勤めたい。人間が生きるということは巧く行かないことに直面することである。失敗したとき、どう乗り越えるかが課題となる。そばにいる大人は助けたくなくなるが、じっと見守り乗り越えたとき褒めることで自信が得られる。親も失敗をしてきたように、失敗をしながら子どもは育っていく。幼児期の子どもの視点に立って気持ちに寄り添うことのできる「親なるもの」の存在が必要である。子どもの世界で身の回りの自立といえば、排泄、衣服の着脱、食事等が自分で出来ることをいう。自分で考え行動を選択し、決定することを自律という。基本的な生活習慣の自立過程では、タイミングを見ながら根気良く働きかけ、子どものやる気を尊重し、自立の状況を見守り時には、後戻りすることもあるが共感を持って受け止める必要がある。機能的には食事や衣服の着脱が出来ていても、親や周囲の人にせきたてられたり、命令されないと出来ない場合は、身の自立はしていても自律心は培われていないといえる。

5. 真の自律は心の内面が成熟しないと培われない。

子どもは未熟なので保護したり、教えなければならぬことも沢山あるが、いつも指図したり、指示や禁止ばかりが多くなると自主性は育たない。指示に従った結果、巧くいかないときは、他罰的になる。自ら考えて判断し行動した結果が、良ければ自信となり、巧く行かなければその子なりに原因や理由を考え再度挑戦する。その過程での試行錯誤から、問題解決の手がかりをつかんでいく。子どもが興味を持つたり、何かをしようとした場合は、できるだけその気持ちを受け止め、見守ることが自立心を育てることになる。子どもがしようとしているとき、大人が先回りして教えたり充たしてしまうのは過保護であり子どもが発達するチャンスを奪うことになる。過保護・過干渉・溺愛は、子どもの発達を妨げる。子ども達は比較的柔軟に環境に適応する力をもっているが、大人の反応には敏感である。環境に適応するためのストレスが、強すぎたり長く続いたりすると好ましくない心身の状態が現れる。

6. 子どものストレス原因

一般的には、父母や家族の不和、家庭崩壊による別離、養育者の交替、弟妹の誕生、自然災害、引っ越し、転校、厳しいしつけ、無視や拒否、兄姉との差別、身内の人の病気や死亡などがある。乳児期では無理な授乳や、離乳食の強制などがあげられる。幼児期は厳しいしつけ、遊びの制限、友達とのトラブル、習い事の強制などが多く、学童期では勉強の強制、仲間外れやいじめられ、友達関係のトラブル、成績への強いこだわり、教師とのトラブルなどがある。思春期では自立の制限、子ども扱いされること、友人関係、異性の関係、付き合いに関する干渉、プライバシーの侵害などさまざまである。幼い子どものストレス反応は、心身症として現れる。下痢、嘔吐、腹痛、動悸、呼吸困難、チック、頻尿、夜尿、頭痛、吃音、指しゃぶり、爪咬みなどがある。行動面では幼児期の息止め発作や激しい癇癪、乱暴などが見られ、家庭内にストレスがある場合が多い(上出弘之, 2000)。反応が重いと思われるときは子ども病院、小児科等の専門機関で受診し、適切な療法を受けることが必要である。予防法は子どもの、長所を認め、重すぎる負担をかけないことである。日頃から話し合いの雰囲気をつくること。愛情に基づいた優しさと厳しさはストレスや逆境を乗り越えるために必要である。

7. 終わりに

子どもが生まれてから、社会人になるまでの子育てでは、親役割の道程でもある。子育ては子どもを中心に家族・地域社会全体で協力連携して行われる最も重要な課題である。楽しく安心して子育てが出来るよう、少子化対策として母子保健を中心に、父親や広く祖父母を含め親と子が健やかに暮らせる社会づくりをめざして2001年から厚生労働省で「健やか親子21」のビジョンが示された(厚生省児童家庭局母子保健課, 2001)。子育てに疲れたときはリラックスタイムが取れるよう、家族の協力は言うまでもなく社会全体でのサポ-トシステムを多様に準備する必要がある。日頃から育児相談や育児クラブ・ネットワーク等を活用しながら、子育てのグループに参加することでエネルギーを蓄え、協力し合って煮詰まらないようにすることである(青木, 2001)。戸惑う問題には、家族や友人祖父母などの協力を求め、保健所や保育所、教育・児童相談所や子どもの医療機関など、専門家の援助や社会的支援を有効に活用して解決することが望まれる。また、子育てで遭遇する問題を個人の問題に留めることなく、社会背景と関連づけて捉え直し、現在の子育て環境改善に向けての活動も期待されている。

参考文献

- 青木紀久代(2001). なぜ子育ては難しくなっているのか - その心理 - 社会的背景, 児童心理, 2(745),10-15.
- 上出浩之(2000). 子どものメンタルヘルス:現代の子どものストレス, 日本精神衛生学会, 21-23.
- 子育て環境を考える会事務局(2000). 育児期の女性のエンパワメント21世紀まちづくりへアクション「子育てだけ!はイヤ!!」. シンポジウム講演集, 6-19.
- 厚生省児童家庭局母子保健課(2001). 健やか親子21 検討会報告書の概要: 母子保健の2010年までの国民運動計画. 月刊母子保健, 500, 2-3.
- 日本子ども家庭総合研究所編(1998). 日本子ども資料年鑑. 6, 92-93.
- 日本子ども家庭総合研究所編(2001). 日本子ども資料年鑑. 7, 334-338.

田中千穂子((2001). 児童心理: 今、母親の危機とは.
金子書房, 2(745), 1-9.

安田美弥子(2001). こころの健康: 新しい夫婦像を求めて - 男と女のそれぞれの自立 - . 日本精神学会誌,
15(1), 3-14.

著者連絡先

〒 870-1201
大分県野津原町廻栖野 2944-9
大分県立看護科学大学
専門看護学講座 小児看護学
森 まさ子
mori@oita-nhs.ac.jp